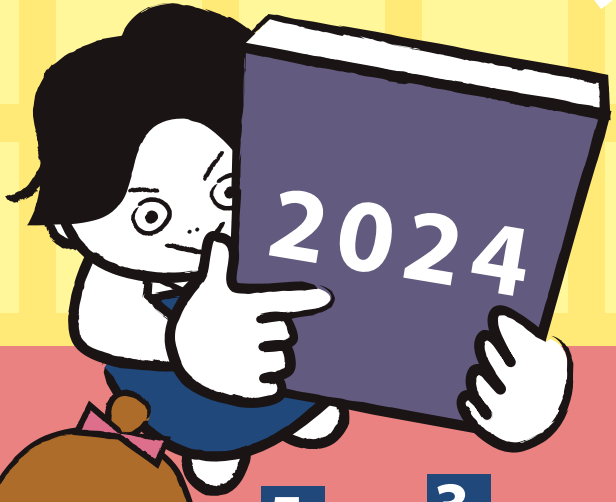
紀伊國屋書店スタッフが全力でおすすめする ベスト30

キノベス!

KINOKUNIYA
BEST BOOKS
2024



1位
『成瀬は天下を取りにいく』
宮島未奈〈新潮社〉

2位
『黄色い家』川上未映子〈中央公論新社〉

3位
『水車小屋のネネ』津村記久子〈毎日新聞出版〉

4位
『くもをさがす』西加奈子〈河出書房新社〉

5位
『世界でいちばん透きとおった物語』杉井光〈新潮社〉

児童書・絵本 ベスト10
キノベス! キッズ 2024

1位 キッズ
『メメンとモリ』
ヨシタケシンスケ〈KADOKAWA〉

2位 キッズ
『パンダのおさじとフライパンダ』
柴田ケイコ〈ポプラ社〉

3位 キッズ
『星をつるよる』
キム・サングン / すんみ[訳]
〈パイ インターナショナル〉

紀伊國屋書店 | FREE

編集・発行　紀伊國屋書店キノベス運営事務局　2024年2月1日発行

宮島未奈さん 特別寄稿

キノベス！2024 第1位『成瀬は天下を取りにいく』

『成瀬は天下を取りにいく』の第一話は「ありがとう西武大津店」です。2020年に閉店した実在のデパートを舞台に、中学二年生の成瀬あかりがローカル番組の生中継に映り込みにいくというお話です。

カバーイラストには在りし日の西武大津店が描かれています。わたしが2020年に撮った写真をもとに、イラストにしてもらいました。「44年間のご愛顧、誠にありがとうございました」の赤い横断幕が閉店間際であることを伝えています。

出版後、当時の西武大津店の店長にお会いする機会がありました。横断幕を張るとき、「この写真がどこで使われるかわからないから、きれいにまっすぐ張ろう」と言っていたそうです。その写真が小説のカバーイラストになり、10万部も刷られることになろうとは誰が想像したでしょうか。

西武大津店にはかつて紀伊國屋書店がありました。隣の大津パルコにも紀伊國屋書店があったのですが、こちらも2017年に閉店しています。できることならご当地大津の紀伊國屋書店に『成瀬は天下を取りにいく』が並んでいるところを見たかったのですが、叶わぬ夢となりました。

しかしながら、全国の紀伊國屋書店が『成瀬は天下を取りにいく』を応援してくださいました。Xにアップされた写真を見ていると、宮城にも、埼玉にも、東京にも、大阪にも、岡山にも、福岡にも、成瀬がたくさん並んでいました。西武大津店に本を並べることはできませんでしたが、全国の書店に西武大津店を並べることができたのです。

©新潮社

おまけにキノベス！2024第1位というすばらしい栄誉にあずかりました。おすすめしてくださったスタッフの皆さまに感謝申し上げます。

『成瀬は天下を取りにいく』の続編、『成瀬は信じた道をいく』にはさらにパワーアップした成瀬あかりが登場します。二百歳まで生きると豪語する成瀬ですから、その歴史はこれからも続いていくことでしょう。今後とも、末永くよろしくお願いします。

宮島未奈 みやじま みな

1983年静岡県富士市生まれ。滋賀県大津市在住。京都大学文学部卒。2021年「ありがとう西武大津店」で第20回「女による女のためのR-18文学賞」大賞、読者賞、友近賞をトリプル受賞。2023年、同作を含む『成瀬は天下を取りにいく』でデビュー。

キノベス！ 2024

「キノベス！」は過去1年間に出版された新刊を対象に、紀伊國屋書店で働く全スタッフから公募した推薦コメントをもとに選考委員の投票でベスト30を決定し、お客様に全力でおすすめしようという企画です。今年は16名の選考委員が全社から集まった応募コメントを熟読し、ベスト30を決定しました。
当社のスタッフが自分で読んでみてほんとうに面白いと思った本ばかりを自信を持っておすすめします。店頭で、ぜひお手にとってご覧ください。

第1位 小説

『成瀬は天下を取りにいく』

宮島未奈

新潮社 1,705円

何!? このしあわせな全能感の塊みたいな小説。私にとって今年さいこーの一冊だ‼ 青春の特権を独自路線で思う存分無駄遣い（傍目には）してて成瀬、最強説を唱えよう。だって成瀬は“誰かのヒロイン”なんかじゃなくて、自分の人生の主人公として本能的に生きているのだ。
平野千恵子／イトーヨーカドー木場店

私は成瀬にはなれないし、島崎にもなれないけれど、この本の読者でいるとき、こんなに面白い成瀬あかり史の証人の一人になれる。そう思うと、なんだか私の日常も悪くないなって思えます。膳所（ぜゼ）から世界へ広がる成瀬の今後も楽しみです。
宮江かほり／京都産業大学ブックセンター

とにかく元気になれてワクワクが止まらない成瀬の世界観、大好きです‼ 全力って、気持ちがいい。すごくいい。うまくいくことばかりじゃないけれど、改めて“夢をもつこと”のトキメキを思い出させてくれた最強の1冊でした。
柴田真奈美／愛知産業大学ブックセンター

とんでもない子がやってきた！と思った。素っ頓狂でキラキラ輝く忘れられない青春の集合体、それが本書。全身全霊で生きる成瀬と出会えば、元気にならずにはいられない。こんな素敵な子と同郷の滋賀県民が羨ましくて仕方がない。
黒田紗穂／天王寺ミオ店

成瀬最高だ‼ 何だこの読後の爽やかさ！成瀬に会ってみたい！成瀬なら絶対天下を取れる！爽やかな青春ストーリー。
髙見晴子／エブリイ津高店

やりたいことにまっすぐでブレなくて、冷静なようで熱い。そんな成瀬が大好きです。読んだ後は心がそわそわして自分も何か新しいことに挑戦したくなりました。
安藤理花／札幌本店

価格表記は全て税込です。

第2位

小説

『黄色い家』

川上未映子

中央公論新社 2,090円

生きるためには拠り所が必要である。痛々しいほどに真っすぐに生きようとする主人公花は、人やモノを強く信仰する。花の一所懸命さは、全く他人事ではなく、彼女は自分であるとさえ感じた。黄色の世界で繰り広げられる魂のこもった会話、心理描写に圧巻。

山田萌果／札幌本店

「すごい小説を読んだ……」と読後放心してしまった、個人的に今年いちばん読みごたえがあった作品。すごすぎてこれ以上語る言葉がないので、ぜひ店頭で本を手に取ってみてほしいです。

千葉拓／横浜店

生きていくのってなんて難しいんだろう。悪に堕ちていく、ただあの場所に居たかっただけなのに。彼女たちの不安も焦りもどうしようもなさも、まるで自分が感じたことのように、わかる、と思ってしまう。語られる言葉の一つ一つ、どれも取りこぼしたくない、すごい作品です。

坂上麻季／京橋店

第3位

小説

『水車小屋のネネ』

津村記久子

毎日新聞出版 1,980円

「自分はおそらく姉やあの人たちや、これまでに出会ったあらゆる人々の良心でできあがっている。」「人間なんて」と人の良心を信じられなくなる時、この言葉を思い出す。自分の良心は誰からもらったものか。忘れないための大切な1冊。

伊藤佑太郎／福岡本店

読み終えるのが惜しくなるほど好きな長編小説に出会ったのはいつ以来だろうか。理佐と律とネネ、彼らの周りの人びとの生活を、できることならずっと見守っていたかった。親しいひとたちにもらったやさしさを、わたしも誰かに分けられたらと思った。

田中沙季／小田急町田店

この本に出会えてよかった。悪意や苦難にばかり目を向けるのではなく、その傍らに寄り添う優しさや誰かの善意があることを、この本は思い出させてくれる。「死にたい」と気軽に、けれど切実に呟ける時代だからこそ、どうかこの物語を読んでほしい。きっと一生ものの拠り所になる。

横山史葉／東京理科大学神楽坂ブックセンター

第4位　ノンフィクション

『くもをさがす』

西加奈子
河出書房新社 1,540円

私も同じ経験をしたので一番苦しかった頃の自分に『くもをさがす』を届けられたら……と願わずにはいられません。病を得る前の自分は本当に傲慢でした。健康に胡坐をかいていたから……ではなく、人生につきまとう寂しさや恐怖に鈍感だったからです。私たちは孤独に生まれ孤独に死ぬ。生きることも死ぬことも怖い。そんな相反する思いを抱える私たちに寄り添ってくれるような一冊です。病気だけではなく、自分一人の力ではどうにもならないことに苦しんでいる人、不自由を感じている人に読んでほしいです。 佐貫聡美／コーポレート統括本部

第5位　小説

『世界でいちばん透きとおった物語』

杉井光
新潮社 737円

書店員としてこの本をおススメしたいけど、POPに何を書いてもネタバレになりそうというジレンマに発売時は悶々としました。どんな話と聞かれたら、読んだ後にそのすごさが響くとしか言いようがありません。本に携わる者として脱帽です。 桜井希帆／新宿本店

第6位　小説

『君が手にするはずだった黄金について』

小川哲
新潮社 1,760円

「認められたくて必死だったあいつをお前は笑えるの？」笑えない。誰にも笑うことなんてできない。とにかく強烈で衝撃的でした。轟木君が最高に好きです。 反中啓子／新宿本店

第7位　小説

『レーエンデ国物語』

多崎礼
講談社 2,145円

本を開けば緻密な設定と世界観の描写で、一瞬でレーエンデの世界に自分が居るような気がしてしまう。物語の舞台は恐ろしい郷土病があり異郷と名高いが、古代樹の森に覆われた美しいレーエンデ。全5巻で紡がれるこの地で起こる革命の物語は幻想的な世界観とは裏腹に生々しさもあり、まさに大人のためのファンタジー作品。2024年刊行予定の4巻、5巻が待ち遠しい。 白井綾乃／熊本はません店

第8位　小説

『近畿地方のある場所について』

背筋
KADOKAWA 1,430円

怖い　とにかく不気味だ
ひとつひとつのエピソードが実話であるかも知れない怖さ
理由がわからない不気味さ
これでもかと不条理が詰め込まれている
近畿地方が怖い　●●●●●が恐い
閉じ込み取材資料は開ける勇気が……ない
小澤由美／アミュプラザみやざき店

第9位　小説

『口訳　古事記』

町田康
講談社 2,640円

神々のパワーに驚愕し、時に共感し、爆笑しながら読めるのが町田康の『口訳　古事記』だ。まず神々の関西弁に衝撃を受ける。さらに読み進めるうち、古典の神々と自分との距離がグンと近づいたような感じを抱く。今のことばを絶妙に取り入れたこの口訳から原文に潜む感情や空気感まで感じられ、古典と現代とはひと続きであることに改めて気づく。 勝間田美野吏／笹塚店

第10位　小説

『ハンチバック』

市川沙央
文藝春秋 1,430円

強烈なパンチを顔面に受けたくらいの衝撃。寝ても覚めてもこの作品のことばかり考えてしまう。本を売る者として市川さんから挑戦状を受け取ったのだと、私はずっと思っている。読書ができることは「当たり前」の幸せではないのだ。 大森輝美／さいたま新都心店

第11位　小説

『歌われなかった海賊へ』

逢坂冬馬
早川書房 2,090円

歴史とは誰かの主観で成り立っているもので、語る人が変われば180°変わってしまう可能性がある。この物語はフィクションだが、そうやって修正されて、曲がって、手を加えられてきた歴史は実際にあるのだろう。それでも人は忘れる生き物だから、せめてこの物語を残したいと思うのだ。
吉岡桜子／西武東戸塚S.C.店

第12位　小説

『星を編む』

凪良ゆう
講談社 1,760円

ほんとうに少しの無駄もない、完璧に美しい物語、だと思う。頁をめくれば真昼の夏の島にふく風が草や海の香りをはこんで、夜は空に花火と星、その下に広がる海と波の音が聞こえ、そこに生きた人たちの愛の物語がある。この続

編で、その後が読めたことがとてもうれしい。
『汝、星のごとく』とともに、ずっと大切にしたい1冊です。
北辻祥子／高槻阪急スクエア店

第13位　ノンフィクション
『あのとき売った本、売れた本』
小出和代
光文社 1,925円

元・紀伊國屋書店新宿本店勤務の方が書かれたということを差し引いても、数多のベストセラーが売れまくった時の裏話や、書店員が仕掛けた本が売れた時の裏話など、本好き&書店好きな人には堪らないエピソードが満載。
荒島麻子／金沢大和店

第14位　小説
『存在のすべてを』
塩田武士
朝日新聞出版 2,090円

こういうのが読みたかった‼　前代未聞の二児同時誘拐から物語は始まり、緊迫する展開に心臓をばくばくいわせながらページを捲る。流行りのどんでん返しや奇をてらった類のものではない。ただ一歩一歩、雪を踏みしめるように静謐の果てへ。
鶴見真緒／武蔵小杉店

第15位　エッセイ
『祖母姫、ロンドンへ行く！』
椹野道流
小学館 1,760円

とにかく祖母姫様が強い！笑　連載時は「自己肯定感の話」として綴られていた今作ですが、もはや見習いたい、というレベルではない自己肯定感の高さを見せつけられます。呆気に取られるのに、読み終わった時には驚くほど清々しい気持ちになっている不思議。
牧野美沙都／入間丸広店

第16位　小説
『鵺（ぬえ）の碑（いしぶみ）』
京極夏彦
講談社 2,420円

17年待った。17年前と変わらぬ読了感に満足した。17年前と変わったのは本の重さと字の細かさで長時間読めなくなった自分のほうである。
田中歩／本町店

第17位　小説
『奇病庭園』
川野芽生
文藝春秋 2,200円

感染する病を反復可能な異常として捉えるならば、私達を“私達”として通じ合わせるものとは何でしょうか。人間の輪郭、健全という全体像に散らばった欠片を回復する鏡のような幻想譚と、その亀裂。新鋭の歌人にして小説家、初の長編作。
當麻卓也／国分寺店

第18位　小説
『夜明けのはざま』
町田そのこ
ポプラ社 1,870円

大切な人を送り出す時、私といて幸せだっただろうかと思う。後悔ばかり思い浮かぶ。でもこの物語は、悲しみに飲み込まれないように、背中をそっと押してくれる。幸せに過ごした時間を思い出させてくれる。辛い時も嬉しい時もお守りとして傍に置いておきたい。そんな一冊です。
海老原歩未／新宿本店

第19位　小説
『まいまいつぶろ』
村木嵐
幻冬舎 1,980円

誰にも言葉が届かない。その苦しみと孤独は想像を絶するものだろう。汚いまいまいつぶろだと蔑まれながら、大きな殻を背負って一歩ずつ歩んでいく。絆の強さと想いに胸が熱くなる傑作。
小屋美都樹／梅田本店

第20位　小説
『リカバリー・カバヒコ 』
青山美智子
光文社 1,760円

痛みを抱える人々にそっと寄り添い、あたたかく包むような優しさが胸いっぱいに広がって、何度も涙が溢れました。もう少し頑張ってみようと背中を押してくれる、心の拠り所となるような物語。ずっと心の中に留めておきたい宝物のような一冊です。
池尻真由美／久留米店

第21位　小説
『この夏の星を見る』
辻村深月
KADOKAWA 2,090円

コロナ禍による休校や緊急事態宣言、これまでに誰も経験したことのない事態を中高生たちの視点から丁寧に描いた物語。あたりまえの日常を見失い、いつもどおりが手に入らないもどかしさ、やりきれなさ。二度とくりかえせない夏だからこそ、かけがえのない優しさや美しさがいっそう胸に迫ってくる。いつか人々がコロナを忘れる時代がやってきたとしても、きっと忘れられずに残る傑作だ。　星真一／新宿本店

第22位　小説

『街とその不確かな壁』

村上春樹

新潮社 2,970円

読むと私の中に言葉が降り積もっていく。様々な色や音、光、匂い、手触り、温度、湿度……それらが幾重にも私を包む。生者と死者、現実と非現実、本体と影、共存し溶け合う世界は不思議な心地よさをくれる。

瀬川目固／イトーヨーカドー木場店

第23位　小説

『地下図書館の海』

エリン・モーゲンスターン／訳:市田泉

東京創元社 3,740円

こどもの頃、本の中はどこまでも奥行きがあって“作者の意図”なんて存在しない世界そのものだった、あの頃が無ければ今も読書を続けていなかったであろう全ての大人たちへ。読むことの、既に書かれた物語に参加することの、不思議さの深淵へ。

當麻卓也／国分寺店

第24位　小説

『眠れない夜にみる夢は』

深沢仁

東京創元社 1,760円

ああ推したい！これこそが発掘本だ！一言では表現できない、エモ×よるべなさ×ままならさが混ざり合う男女を描いた短編集。キノベスに載せると決意してから半年、これ以上に熱量が乗る本は出てこなかった。この才能を、一緒に見つけてくれませんか？

鶴見真緒／武蔵小杉店

第25位　短歌

『4』

青松輝

ナナロク社 1,870円

突き放すように寄り添って、赤裸々に謎めいて、クールで時にチャーミングな「解釈したい」に満ち溢れた歌集。絶望にユーモアで抗う術を教えてくれたような気がする。

佐藤玲一／京橋店

第26位　小説

『列』

中村文則

講談社 1,540円

現実かどうかも分からない奇妙な世界。謎の植物。謎の鳥。落ちているカバン。地面の文字。何か、とてつもなくヤバいものを読んでいるという感覚があった。ページをめくるたびに呼吸が苦しくなる。それでも、目が文字を追うことをやめられない。いったい何の列なのか、その先には何があるのか、知るまで終われない。

松本彩香／横浜営業部

第27位　小説

『エヴァーグリーン・ゲーム』

石井仁蔵

ポプラ社 1,870円

今まで生きてきて、命を懸けて何かに取り組んだことはあるか？チェスという盤上でのスポーツに、ここまで熱く心を動かされるのは初めてだった。敗者がいるから勝者がいる。当たり前のことなのに、誰にも負けて欲しくない‼ 血反吐を吐いてでも、戦っていたい。命尽きるその時まで、チェックメイトは言わせない。

海老原歩未／新宿本店

第28位　小説

『リスペクト―R・E・S・P・E・C・T』

ブレイディみかこ

筑摩書房 1,595円

ホームレスシェルターを追い出された若きシングルマザー達が、住む家を、失った尊厳を取り戻そうと立ち上がる――これ以上“胸アツ”な物語があるでしょうか!? 食べ物や住居のみならず、人から機会や尊厳を根こそぎ奪って再起不能にしてしまう、それこそが貧困の本当の恐ろしさなのだと痛感しました。何の取り柄も自信もない非力な自分にも「勇気」ってものが実はあるんじゃないか……そんな風に思わせてくれる作品でした。心の底からお薦めです。

佐貫聡美／コーポレート統括本部

第29位　ノンフィクション

『ネット右翼になった父』

鈴木大介

講談社 990円

「思想が違う」と晩年の父を拒絶してしまった著者。なぜそうなったのかを探っていくルポ、と思いきや、著者から見た父親像と周囲の印象が噛み合わない。謎が謎を呼ぶ展開に引き込まれて読み進めるうちに、親子断絶の真相が明らかに。間違いなく今年一番泣いた本でした。

植松野乃子／新宿本店

第30位　小説

『心臓の王国』

竹宮ゆゆこ

PHP研究所 2,090円

ジェットコースターのような展開に、何度も息を飲みました。
心のど真ん中に突き刺さった友情！
これぞ青春という喜び。
そして、覗いてはいけない世界の存在。
本当に自分が息をしているのか感じられなくなる衝撃の一冊でした。

木曽由美子／天王寺ミオ店

「キノベス！2024」選考委員が選ぶ！2023年の収穫

ベスト30を選んだ選考委員に、キノベス！2024では惜しくもランク外になってしまったものの
個人的にはとってもオススメしたい1冊を挙げてもらいました。

小説

『リラの花咲くけものみち』

藤岡陽子
光文社 1,870円

大人はもちろん、中高生、大学生や社会人になったばかりの方に特にお勧めしたいです。心に傷を負って、少し先のことも何も見えず分からなくなってしまった時、この本を読むと一人じゃない、周りにきっと助けてくれる人がいる、それまで知らなかった場所で新しいことや人に出会い、自分も変わってゆけると思えるようになる物語です。

兼平純子／札幌本店

ノンフィクション

『めざせ！ムショラン三ツ星 刑務所栄養士、今日も受刑者とクサくないメシ作ります』

黒柳桂子
朝日新聞出版 1,650円

罪を犯した人々と、彼らを見守る著者たちとの笑えるエピソードが満載だ。炊場で起きる問題をなんとか解決していく著者の奮闘は参考になる部分が多かった。不謹慎と言うなかれ。「食」は思っている以上に生きていく上で重要なのだ。

大森輝美／さいたま新都心店

ノンフィクション

『特攻服少女と1825日』

比嘉健二
小学館 1,650円

過去最速で一気読みしたノンフィクション大賞受賞作。とにかく、登場人物がみんな、魅力的で、ピュアで、熱量がすごい。「懐かしい」だけで終わらない、現在に通じる、心に触れる何かを感じさせてくれる1冊。

久保島淳／流山おおたかの森店

コミック

『今日、駅で見た可愛い女の子。〈1〉』

さかなこうじ
フレックスコミックス 737円

駅で見かけた可愛いあの子が気になってしょうがない！なぜなら身につけるアイテムすべてが可愛くて、世代には刺さりまくり。ただ可愛い子に癒されるだけではなく、可愛いを謳歌するこの子に元気をもらえます。

植松野乃子／新宿本店

小説

『愛 新装版』

ウラジーミル・ソローキン／訳:亀山郁夫
国書刊行会 2,860円

「現代ロシア文学のモンスター」と評されるソローキンの短編集が装いも新たに発売されました！話の内容とタイトルのセンスが尖り過ぎているのでは？と恐怖が浮かび上がった「愛」、教師と生徒のアブノーマルな授業に羞恥心が抑えられない「自習」など、日常と狂気の境を飛び越えた人々があなたを未知の世界へ誘います。個人的には「競争」が一番のおすすめです！ジェットコースターばりの場面展開に心臓の鼓動が鳴りやみません‼ 今年たくさんの人に勧めまくった1冊でして、未読の人はぜひここからソローキン沼にハマって欲しい‼ グロテスクなの？エンタメなの？純文学なの？こんなにも分類が難しくて心揺さぶられる作品に出会えて本当に良かった。ソローキン、一生愛す。

玉本千幸／新宿本店

小説

『遠きにありて、ウルは遅れるだろう』

ペ・スア／訳:斎藤真理子
白水社 2,200円

これほど精密に作られた暗闇はない。即興劇という現実と虚構との狭間に描かれる、記憶と現在とを区分する光のない広がり。遠さ・距離が可能にするものとは何でしょうか。「韓国文学史で前例なき異端の作家」、待望の初邦訳。

當麻卓也／国分寺店

エッセイ

『月と散文』

又吉直樹
KADOKAWA 1,760円

この作品を客観的に読むことなどできない。又吉さんが書いているのだから素晴らしいに決まっていると思いながら読み始めたし、いや、期待以上だった、と満たされた気持ちで読み終えた。17年間又吉さんの表現を追い続けた人間の、彼に対する圧倒的な信頼である。その言葉がなければ乗り越えられなかった夜がいくつもあった。だからどうか、あなたにもこの本を手に取ってほしい。

田中沙季／小田急町田店

エンターテイメント

『歌詞の本棚　情熱の薔薇』

歌詞:甲本ヒロト／絵:ダイスケ・ホンゴリアン

リットーミュージック 1,980円

なんども聞いてきた名曲が本になった。
ページをめくるたびにイメージの中で爆音が響く。
なんど読み返しても体温が上がる。
リットーミュージックが手がける「歌詞（うた）の本棚」第一弾。めちゃくちゃかっこいい一冊です。

鶴見祐空／西武東戸塚S.C.店

小説

『マザー／コンプレックス』

水生大海

小学館 803円

最初は名古屋の地名が出ているということで手に取ってみました。読み進めていくと様々な登場人物の考えが入り乱れていく展開に先が気になり遅読な自分が一気に読み切ってしまいました。　石畑裕介／ mozoワンダーシティ店

小説

『鬼人幻燈抄　平成編　泥中之蓮』

中西モトオ

双葉社 1,430円

2019年単行本として刊行されたシリーズものが遂に完結！江戸から平成へ移り行く中、人として、また鬼として生きた者たちの受け継がれてきた想いに止まらぬ涙涙涙!!!シリーズものとして流した涙は今生一です！毎巻のカバーイラストと表紙イラストの違いも必見です。

豊永大／グランフロント大阪店

小説

『赤泥棒』

献鹿狸太朗

講談社 1,980円

性的マイノリティ、お金の価値、才能の有無。現代社会の正論に舌を出しつつ、別角度の「正しさ」を鮮烈に見せつける。ポップな語彙でスラスラ読めるのに、読み終わるころには心がズタズタになる一冊。若者と、かつて若者だった人へ。　岡田直也／本町店

評論

『スピッツ 2』

Spitz

ロッキング・オン 2,970円

『スピッツ1』発売から25年。9thアルバム『ハヤブサ』から最新アルバム『ひみつスタジオ』まで9作のオリジナルアルバムのインタビュー集。ファン投票1位、スピッツの創作のピークの一つにもなった『三日月ロック』のインタビューは秀逸。　川崎翼／天王寺ミオ店

エッセイ

『オタクのたのしい創作論』

カレー沢薫

文藝春秋 1,650円

オタクのためにオタクに届く言葉で（多少の下品には目をつぶっていただきたい）相談に答えるという、一見需要の限られた本かと思いきや、人間関係に悩むすべての人への回答にもなり得るという、隅々まで行き届いた狭さと深さに大満足。身近にありながら、その深淵に触れてこられなかった半端者の私にも、その言葉は心地よく響いた。

西田ひで子／ゆめタウン廿日市店

小説

『Q』

呉勝浩

小学館 2,420円

体ごと持っていかれる！とてつもない作品に出会ってしまった。この迫力、この疾走感！文章が身体中を駆けめぐる。ページをめくる手が止まらない。全身に余韻を残すこのパワーあふれる一冊をぜひぜひ体感していただきたいと思います。　吉田咲子／徳島店

小説

『百年の子』

古内一絵

小学館 1,980円

学年誌の歴史を背景に、戦中から現代へ繋がる親子の絆、子どもと女性の人権をめぐる壮大な人間ドラマに、涙、涙。いつの時代も熱い信念を持ち、大切なことを守り抜くことが未来を創っていくのだと胸がいっぱいになりました。心から出会えて良かったと思える、最高の感動作です。

池尻真由美／久留米店

その他

『知りたいこと図鑑』

みっけ

KADOKAWA 1,870円

「こんな本が欲しかった！」ページをめくると、様々なモチーフを組み合わせてデザインされた教養雑学が次から次へと心を躍らせる。モールス信号、88星座、夜明けと夕暮れをあらわす言葉はなんと美しい日本語なのでしょうか。眺めるだけで楽しめる一冊。　松元久美／長崎店

<キノベス！ 2024選考委員会>

兼平純子 札幌本店
大森輝美 さいたま新都心店
久保島淳 流山おおたかの森店
植松野乃子 新宿本店
玉本千幸 新宿本店
當麻卓也 国分寺店
田中沙季 小田急町田店
鶴見祐空 西武東戸塚S.C.店
石畑裕介 mozoワンダーシティ店
豊永大 グランフロント大阪店
岡田直也 本町店
川崎翼 天王寺ミオ店
西田ひで子 ゆめタウン廿日市店
吉田咲子 徳島店
池尻真由美 久留米店
松元久美 長崎店

［事務局］
松本麻子 販売促進部
松倉建太朗 ブランド事業戦略部
齋藤敦子 販売促進本部

キノベス！キッズ2024 第1位『メメンとモリ』
ヨシタケシンスケさん 特別寄稿

この度はキノベス！キッズの第1位に選んでいただき、本当にありがとうございます。

この本は、この数年間、私がぼんやり思っていたことを一冊にまとめたものです。私はもともと心配性で、全てのことにおいて「うまくいかなかったらどうしよう」「思い通りにならなかった時、自分はどれほどガッカリしてしまうんだろう」などと、そんなことばかり考えてしまう心の癖があります。自分がガッカリすることを極度に恐れる「ガッカリ恐怖症」とでもいえるものです。思い通りにならなかった時、どう考えればちょっとでも気持ちが楽になるか、事実をどう受け止めたら、ガッカリしている時間を少しでも短くできるか。そんな自分自身に対する一つの答えが、今回の本、「メメンとモリ」です。

小さいお子さんにとっては意味がわからず、「？」となってしまう箇所がいくつかあると思います。でも、そのわからない部分を心の奥のどこかにしまっておいてもらえたら。5年後、10年後のある瞬間に「これのことか！」と思い出してもらえたら。さらに「メメンとモリって、ラテン語の格言『メメントモリ』のダジャレだったのか！」と苦笑いしてもらえたら。そんなことを夢見ています。

逆に言えば、今のお子さんたちには、「メメンとモリ」の内容が何一つピンとこない、おおらかで楽しい子供時代をおくってもらいたい、との願いもあります。私が作家になってからこの10年、本当に「思ってたのと違う！」出来事ばかりで、子供たちに対して我々大人が「楽しそうな未来」や「いい加減でもどうにかなる社会」や「考え方や生き方の具体的な選択肢」を見せてあげられていないことは、本当に申し訳なく思っています。「ガッカリ恐怖症で、いろんなことから逃げ続けてきたけれど、ひょんなことから40歳で作家になり、たくさんの人に本を読んでもらえたおじさんだっている」。そのことを、伝えていけたら本望です。

ヨシタケシンスケ

1973年、神奈川県生まれ。筑波大学大学院芸術研究科総合造形コース修了。日常のさりげないひとコマを独特の角度で切り取ったスケッチ集や、児童書の挿絵、装画、イラストエッセイなど、多岐にわたり作品を発表している。『りんごかもしれない』(ブロンズ新社)、『しかもフタが無い』(PARCO出版)、『結局できずじまい』(講談社)、『りゆうがあります』(PHP研究所)、『にげてさがして』(赤ちゃんとママ社)、『その本は』(ポプラ社)など様々なジャンルで多数の著作がある。

キノベス！キッズ 2024

「キノベス！キッズ」は、過去1年間に出版された新刊児童書・絵本を対象に、紀伊國屋書店で働く全スタッフから公募した推薦コメントをもとに選考委員の投票でベスト10を決定し、お客様に全力でおすすめしようという企画です。今年は16名の選考委員が全社から集まった応募コメントを熟読し、ベスト10を決定しました。当社のスタッフが自分で読んでみてほんとうに面白いと思った児童書・絵本ばかりを自信を持っておすすめします。
店頭で、ぜひお手にとってご覧ください。

第1位 児童書

『メメントモリ』

ヨシタケシンスケ
KADOKAWA 1,760円

生きていると楽しいこと、嬉しいこと、悲しいこと、不安なこと、どれも必ず直面するときがあるけれど“今この瞬間を生きる”という大切なことを教えてくれる1冊。
脇谷菜未／プライムツリー赤池店

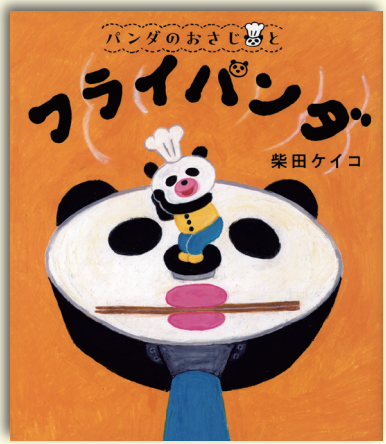
ヨシタケシンスケのやさしいタッチで描かれるちょっとだけ難しい話。
生きること、死ぬこと。必ず待ち受けるものに対して、どう考えるか。
子供には考えるきっかけを、大人には再び考え直す機会を与えてくれます。
赤松勇哉／厚別店

こどもは楽しく読めて、大人には心にささる少し哲学的な絵本。色々気付かされるし読んだあと心が軽くなる。考え方次第なんだなぁ。何回も繰り返して読みたくなる絵本です！
日髙久美子／ゆめタウン廿日市店

「メメント・モリ」とはラテン語で「死を想え」という意味だそう。タイトルの通りこの本は、2人の姉弟が日常の出来事から感じ想う本です。人間という生き物は、思考するから悩み苦しむが、思考するからこそ喜び楽しむ。改めて人間って愛おしいなと思いました。特に2話目のゆきだるまの話は、優しさに溢れて大好きです。
山口智子／泉北店

ほのぼのとした見た目のメメントモリの姉弟が教えてくれる、実は深〜いお話。生きることに意味を求めている大人にも刺さる言葉の数々。正解はひとつじゃないこと。いろんな見方があっていいこと。子どもの柔らかい心にこそ根付いてほしいと思います。
三瓶直美／入間丸広店

「人は何のために生きてるの？」という一言では語れない人生哲学もヨシタケさんの愛らしいイラストと柔らかな文章で、心にすっと届いて来ました。
笹倉宏美／いよてつ髙島屋店



第2位

絵本

『パンダのおさじとフライパンダ』

柴田ケイコ　　**ポプラ社** 1,540円

おさじの不思議なじゅもんを唱えると、読んでいるこちらもなんだか元気が湧いてくる！思わず声に出したくなるおさじくんのじゅもんを、4歳の子と一緒にケラケラ笑いながら唱えてます。可愛いパンダたちに癒されながら、毎日を過ごす上で大切なことを教えてくれるとっても素敵な1冊です！　伊勢川詩織／鶴見大学ブックセンター

残念なことにわが家のフライパンはフライパンダではなかったので「♪アポパイ　ポコパイ」と踊ってみても何もならずに珍妙なダンスを披露するばかりでした。
「パンダッチュのポー！」の前に気づけたことは幸いでした。
澁谷由佳／仙台店

パンどろぼうシリーズ柴田ケイコさんの新しいキャラクター誕生！「パンダのおさじくん」が退屈な毎日をほんのちょっぴりの工夫で楽しい毎日に変えてしまうお話です！歌って踊れる不思議な呪文が楽しく、ついつい口に出して踊りたくなってしまいます。おさじくんの次の新刊が発売予定との事なので、パンどろぼう以上に推していきたい1冊です。
古城はるか／アミュプラザおおいた店

第3位

絵本

『星をつるよる』

文・絵：キム・サングン　訳：すんみ　パイ インターナショナル 1,650円

サングンブルーと呼ばれる美しい青の夜空。淡く光る星々。そして眠れない夜をすごすかわいい仲間たちが、ひとりぼっちの夜にやさしく寄り添ってくれます。
みんなを眠れるまでぎゅっと抱きしめてくれるうさぎに、自分も抱きしめられているみたい……。きっとあたたかい気持ちでぐっすり眠れますよ。　野澤真由／笹塚店

こどもの頃、眠れない夜は、暗い中で自分だけが眠れないんじゃないかと、泣きたくなるほど不安だった。そんなあの頃の自分にこの絵本をそっと贈ってあげたい。眠れない夜も楽しいよ！　尾藤秀子／川西店

やさしいお話にかわいらしい絵。驚くほどまばゆい星が溢れた美しい見開き……おやすみ前の安らぎの時間に、最高の一冊。
木村久美子／新宿本店

第4位　絵本

『どすこいみいちゃんパンやさん』

町田尚子

ほるぷ出版 1,650 円

どすこいポーズが似合いすぎる太ましい猫みいちゃん。こんな頼もしいパン屋さんが近所にあったらなぁ……！
耳先カットされた保護猫が主人公のモデル。驚いた時の毛並や不細工なあくび顔。そんな細やかな描写は猫好きにはたまりません。　伏見真理／相模女子大学ブックセンター

第5位　絵本

『大ピンチずかん 2』

鈴木のりたけ

小学館 1,650円

待ってました第二弾‼ くらしのなかには大ピンチがたくさん。そのしょうたいをはっきりさせたらあわてずにすむ。親子で爆笑のあるある大ピンチ満載で大ピンチグラフで分析もできる。この絵本を常に手元において突然の大ピンチに備えておこう。
瓜生春子／川越店

第6位　児童書

『放課後ミステリクラブ 1 金魚の泳ぐプール事件』

知念実希人

ライツ社 1,210円

子ども向けだからと侮るなかれ。「プールに金魚が現れる」という謎も魅力的だけど、キャラクターや展開、伏線の張り方も一切妥協がないです！ミステリ好きの大人だってワクワク楽しめます！
シリーズ物だし、学級文庫の新定番になること間違いないです！
米山賢史／横浜店

第7位　絵本

『ゆうやけにとけていく』

ザ・キャビンカンパニー

小学館 1,870円

友達とバイバイをした帰り道、どこからともなくカレーの香りがした。楽しかったこと、悲しかったこと、今日あった色々なことを抱えて家路を急ぐ。そんなありふれた、でもたまらなく懐かしい思い出が、鮮明に蘇りました。
夕暮れから段々と夜になり、夜空に星が瞬く。移りゆく空がとても美しく、穏やかな気持ちになります。
吉賀美和／日本文理大学ブックセンター

第8位　児童書

『一年一組　せんせいあのね こどものつぶやきセレクション』

選：鹿島和夫　絵：ヨシタケシンスケ

理論社 1,650円

日々の生活の中で起こる小さな出来事を、こどもたちの言葉で表したその鮮やかさ！キラキラしていて、カラフルで、かわいくって、のびやかで、はっとさせられる言葉たちが宝物のように一冊の本に収まっています。
植尾あゆみ／あらおシティモール店

第9位　児童書

『いちじくのはなし』

しおたにまみこ

ブロンズ新社 1,210円

児童書の主人公が胡散臭いなんて滅多にない話ですが、このいちじくが胡散臭いのです。
それにもかかわらず、気付けば心つかまれる語り口。
胡散臭い主人公なんて嫌だなあ、と思ったあなた。騙されたと思って読んでみて下さい。病みつきになりますよ。 河本絵美／梅田本店

第10位　児童書

『図解 はじめての絵画 （小学館の図鑑 NEOアート）』

監修：青柳正規

小学館 2,970円

大人も楽しめる内容になっており、親子の会話のきっかけにもなります。美術館に実際に行ってみたくなるし、美術館では見られない細部の拡大図が見られたりするところも良いです。
粕谷育美／大阪第一営業部

「キノベス！キッズ2024」選考委員が選ぶ！2023年の収穫

ベスト10を選んだ選考委員に、キノベス！キッズ2024では惜しくもランク外になってしまったものの
個人的にはとってもオススメしたい1冊を挙げてもらいました。

絵本

『つきはかがやく』

文:パトリシア・ヘガティ　絵:ブリッタ・テッケントラップ　訳:木坂涼
ひさかたチャイルド 1,980 円

月の光に照らされた自然の景色や、そこに生息する動物たちが描かれ、季節の移り変わりとともに月の形や輝きが変化していきます。光沢加工が施された月が幻想的で美しく、しかけも楽しめる絵本です。　工藤由起子／札幌本店

絵本

『きょうりゅうゆうえんち』

やましたこうへい
ポプラ社 1,870円

恐竜が出てくる絵本って沢山ありますが、この絵本の面白いところは生きている恐竜自体が建物や乗り物になっていたり、ツノが輪投げになって遊べるところです。こんな発想もあるんだなと感心しました。細かく恐竜の名前が記されてるのが良いと思います。楽しい時間と共にラストは勇気を貰える絵本でした。　室和未／仙台店

絵本

『リジーと雲』

作:テリー・ファン&エリック・ファン　訳:増子久美
化学同人 2,200円

ミロと名付けた雲がげんきでしあわせに暮らせるよう大切にお世話していたリジー。散歩にもつれていきます。きせつはめぐり、ミロはおおきくなり、やがて天井をおおいつくすまでになります。きげんがわるくなってしまったのか、ゴロゴロと大雨が……。リジーは大切なことを忘れていたことに気がつきます。ふんわりと優しい気持ちになる1冊です。
瓜生春子／川越店

絵本

『きゅうきゅうばこの絵本』

編・著:WILLこども知育研究所　絵:川原瑞丸　監修責任:坂本昌彦
金の星社 1,870円

自分で手当てする？病院に行く？それとも救急車？正しいと思っていた手当の方法、実は間違ってるかも?! 大人でも迷ってしまう症状のあれこれを分かりやすく教えてくれる、一家に一冊欲しい絵本です！
石川陽子／流山おおたかの森店

絵本

『せかいいちれいぎただしいかいじゅうボンバルボン』

キューライス
小学館 1,540円

礼儀正しく上陸させてもらうかいじゅうが何とも新鮮！「かいじゅう=建物を壊して人を踏みつぶす」という常識が覆される!? 丁寧な言葉遣いはどんなかいじゅうもステキに見せてくれる！この絵本はお子様のマナー教育にもバッチリです。
都野佳乃／新宿本店

絵本

『ぽわぽわもりのおかいもの』

かとーゆーこ
世界文化社 1,540 円

ぽわぽわもりにあるいろいろなお店にお使いに行くリスのルントちゃん。かわいいものがたくさん描き込まれた店内は、ゆびさしして探し絵遊びやあてっこ遊びも楽しめます。
小さな住人たちそれぞれのストーリーもあり、何度読んでもおもしろい♪“ぽわぽわ”のかわいい響きにもにっこりします。
野澤真由／笹塚店

絵本

『おふろおじゃします』

たしろちさと
文溪堂 1,650円

たろちゃんとかばちゃんはトロッコに乗ってお風呂めぐりに出かけます。どのお風呂に入りたい？盛り上がること間違いなしです。最後の観音開きで大きく開くページは迫力満点です。　葉石麻実／国分寺店

絵本

『ニンジンジン』

キューライス
白泉社 1,430円

謎のいきもの『ニンジンジン』。ニンジンジンとうさぎたちの攻防戦がおもしろい。ニンジンジンを捕まえられるのか?? リズムに乗れる文章も楽しい一冊です。
沖田和子／ららぽーと横浜店

絵本

『日本のことばずかん　はな』

監修：神永曉

講談社 2,750円

毎日必ず使う日本のことば。伝聞の為だけではなく、自ら考える時にも使うことば。いろいろなことばを知っていれば、それだけ自分の世界は豊かになるかもしれない。ことばの絵本なのに、写真・絵画の美しさに目を奪われます！ハッと息を呑む瞬間をぜひ。　松田ありか／金沢大和店

絵本

『じんせいさいしょの』

おおのたろう

KADOKAWA 1,650 円

お子様の成長記録としても楽しめる！「こんなことあった！」とご家族や、成長したお子様と懐かしむこともできる素敵で可愛い1冊です。　矢幡智子／梅田本店

絵本

『ぼくのへや』

伊藤ハムスター

KADOKAWA 1,430円

あなたの宝物ってなんですか。自分らしさってなんだろう？あらいぐまと一緒に探してみてください。
自信なんてなくたって良いんだよって、こころが軽くなる絵本です。
「探し絵」としても楽しめますよ。　西尾祥子／泉北店

絵本

『海にしずんだクジラ』

文：メリッサ・スチュワート　絵：ロブ・ダンラヴィ　訳：千葉茂樹

BL出版 1,980円

あの大きな大きなクジラが死んだら、どうなるのだろう、なんて、考えたこともなかった。この絵本に出会うまでは。クジラは死んで海に沈み、死んだ後、50年もの間、深海で生きるもの達のためにそこにいてくれる。みんなが生きていくために。ありがとう、クジラさん。　尾藤秀子／川西店

絵本

『ぬまの100かいだてのいえ』

いわいとしお

偕成社 1,320円

オタマジャクシの「ウズ」が暮らす沼に、大きな「まんげついわ」が落ちてきた！じわじわと沈んでくる岩をなんとかする為に、ウズは勇気を出して沼の底に向かいます。
100階建ての家には誰が住んでいるの!? 落ちてくる岩はどうなるの!? その結末は……！　横山彩香／エブリイ津高店

絵本

『きいろとしろ』

小亀たく

みらいパブリッシング 1,540円

出会いの喜び、相手を好きと思う気持ち、別れの悲しみ。ひとつひとつに心を動かして生きているのは、鳥たちもきっと同じなのだと気づきました。「きいろ」たちがそっと寄り添ってくれているような、あたたかさを感じる絵本です。
祖父江由紀／徳島店

絵本

『旅するわたしたち On the Move』

作：ロマナ・ロマニーシン／アンドリー・レシヴ　訳：広松由希子

ブロンズ新社 2,420円

移動というテーマをこんなに美しく描いた本に初めて出会った。そしてただ美しく洒落たビジュアルブックにはとどまらず、「意思のある一歩一歩」を子どもも含むより多くの人に伝えたいという作家、訳者、編集者の熱い思いがひしと伝わってくる素晴らしい科学絵本。
竹下心／ゆめタウン博多店

絵本

『まるごとうちゅうカレー』

チョーヒカル

PHP研究所 1,650円

きれいな宇宙が丸ごとカレーに？幻想的な惑星たちがきざまれいためられ煮込まれてカレーになっていく様子が、おさないころの宇宙への不思議な気持ちを思い出させてくれました。　大田紗希／久留米店

<キノベス！キッズ2024 選考委員会>

工藤由起子 札幌本店
室和未 仙台店
瓜生春子 川越店
石川陽子 流山おおたかの森店
都野佳乃 新宿本店
野澤真由 笹塚店
葉石麻実 国分寺店
沖田和子 ららぽーと横浜店
松田ありか 金沢大和店
矢幡智子 梅田本店
西尾祥子 泉北店
尾藤秀子 川西店
横山彩香 エブリイ津高店
祖父江由紀 徳島店
竹下心 ゆめタウン博多店
大田紗希 久留米店

［事務局］
岸本佑香 販売促進部
松倉建太朗 ブランド事業戦略部
原田千明 ブランド事業戦略部

2024

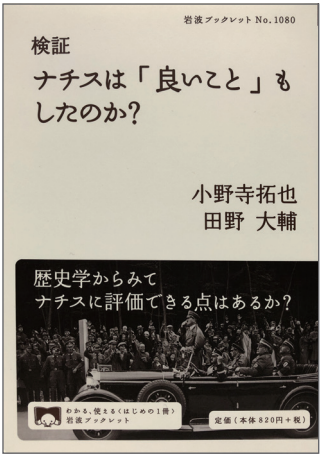
紀伊國屋 じんぶん大賞

読者と選ぶ人文書ベスト30

\大賞/

『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか？』

小野寺拓也／田野大輔（岩波書店）



2位 『タイミングの社会学 ディテールを書くエスノグラフィー』
石岡丈昇 （青土社）

3位 『トランスジェンダー入門』
周司あきら／高井ゆと里 （集英社）

4位 『訂正可能性の哲学』東浩紀 （ゲンロン）
5位 『万物の黎明 ― 人類史を根本からくつがえす』デヴィッド・グレーバー／デヴィッド・ウェングロウ／酒井隆史 [訳] （光文社）
6位 『庭のかたちが生まれるとき ― 庭園の詩学と庭師の知恵』山内朋樹 （フィルムアート社）
7位 『マルクス解体 ― プロメテウスの夢とその先』斎藤幸平 （講談社）
8位 『「能力」の生きづらさをほぐす』勅使川原真衣 （どく社）
9位 『土偶を読むを読む』望月昭秀 [編] （文学通信）
10位 『超人ナイチンゲール』栗原康 （医学書院）

編集・発行　紀伊國屋書店 じんぶん大賞2024事務局　2024年2月1日発行

紀伊國屋書店 | FREE

大賞『検証　ナチスは「良いこと」もしたのか?』特別寄稿

小野寺拓也さん

「歴史研究者の仕事は、事実があったかなかったかを見極めて社会に提示すること。それ以降は人びとが各自で判断すればよい」。そう考える方は少なくないのではないでしょうか。確かに事実の確定は重要です。でもそれ以上に歴史研究者にとって重要な仕事は、その事実を「文脈の中に位置づける」という営みだと思います。その事実が時代や社会全体の中でどのような意味を持っていたのかを、適切に判断すること。そのために必要なのが、それまでの研究の膨大な積み重ねと向かい合うことです。そうした「研究史」の蓄積を無視してしまうと、どんな優れた分析能力をもつ研究者であっても、全体像や文脈が見えないまま、個別の事象について誤った判断をしてしまうことになります。

ナチズムを例にしながら、「歴史的に物を考えるとはどういうことなのか」をできるだけ多くの人びとに伝えたいというのが、私が本書を執筆した一番の動機でした。多くの読者に支えられてこの賞をいただけたことを、何よりも嬉しく思います。

小野寺拓也　おのでら たくや

1975年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）。昭和女子大学人間文化学部専任講師を経て、現在、東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授。専門はドイツ現代史。
著書に『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」――第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』（山川出版社）、訳書にウルリヒ・ヘルベルト『第三帝国――ある独裁の歴史』（KADOKAWA）などがある。

田野大輔さん

「ナチスは良いこともした」という主張が後を絶たないのは、自分の願望に合わせて都合よく歴史を語ろうとする姿勢があまりにも広まっているからです。人それぞれの立場から過去を見ようとする姿勢は、ある程度は避けられないものですが、だからといって、好きなように歴史を切り取って叙述してよいというわけではありません。著しく妥当性を欠いた恣意的な主張に対しては、専門家がきちんと反論しておかなければならない。さもないと、社会を成り立たせている基本的な価値観まで損なわれてしまう。

私が本書を執筆しようと考えた理由には、そうした危機感がありました。

本書の刊行後、「歴史修正主義と闘う武器を与えてもらった」という感想が寄せられました。巷に蔓延するナチス肯定論に自信をもって反論する手段を提供すること、それが本書を執筆した最大の狙いでしたから、まさに意を得たりという思いです。社会の基盤を守るための「雪かき」にも似た仕事でしたが、そうした努力が多くの方々に支持され、このような賞までいただけたことを、とても心強く思っています。

田野大輔　たの だいすけ

1970年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（文学）。大阪経済大学人間科学部准教授等を経て、現在、甲南大学文学部教授。専門は歴史社会学、ドイツ現代史。
著書に『ファシズムの教室――なぜ集団は暴走するのか』（大月書店）、『愛と欲望のナチズム』（講談社）、『魅惑する帝国――政治の美学化とナチズム』（名古屋大学出版会）などがある。

「読者の皆さまと共に優れた人文書を紹介し、魅力ある『書店空間』を作っていきたい」――との思いから立ち上げた「紀伊國屋じんぶん大賞」は、今年で14回目を迎えました。おかげさまで、本年もたくさんのご応募と推薦コメントをお寄せいただきました。
一般読者の方々からいただいたアンケートを元に、出版社、紀伊國屋書店社員による推薦を加味して事務局にて集計し、ベスト30を選定いたしました。

＊2022年11月以降に刊行された人文書を対象とし、2023年11月1日～11月30日の期間に読者の皆さまからアンケートを募りました。当企画における「人文書」とは、「哲学・思想、心理、宗教、歴史、社会、教育学、批評・評論」のジャンルに該当する書籍（文庫・新書含む）としております。
＊推薦コメントの執筆者名は、一般応募の方は「さん」で統一させていただき、選考委員は㊥、紀伊國屋書店一般スタッフは所属部署を併記しています。

価格表記は全て税込です。

2024

紀伊國屋じんぶん大賞

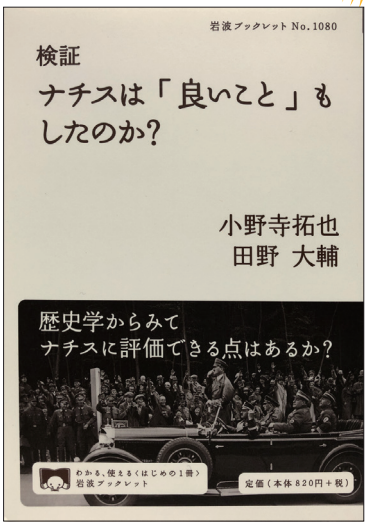
読者と選ぶ人文書ベスト30

大賞

『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか？』

小野寺拓也
田野大輔

岩波書店
902円



じんぶんくん

今年の必読書と言える一冊です。「ナチスは良いこともした」といったセンセーショナルなフレーズをSNS等で見かけることもあるが、なぜそれは誤りと言えるのかを丁寧に解説しています。本書は福祉・経済政策、政治的な行いには意図があり、必ずしも表面には見えてこない思想・結果もあるのだと教えてくれます。歴史修正主義によって過去の事象が捻じ曲げられようとした時、いつでも〝検証〟できる市民でありたい。読後そんな思いを強く持ちました。
鈴木郁美／イトーヨーカドー川崎店

「確かに悪いこともしたけど、良いこともしたよね」という考え方に潜む危うさを教えてくれる一冊。悪が際立っていると、「良いこと」が逆に目立ってしまうが、そもそもそれは本当に良いことなの？　根っこは悪に基づいているのでは？　ということを丁寧に検証していく。ぜひ学生さんに読んでもらいたい本。　横浜店／千葉拓

ナチスに関して人口に膾炙している俗説を明快な枠組みと研究の蓄積によって丁寧に検証していく良書である。歴史的事実を「事実」「解釈」「意見」の三層に分けて考えるという試みは、人文科学領域における基本的なパースペクティブになりうる重要な指摘と思われる。　匿名希望さん（一般）

限られた頁数で研究者の知見と成果に触れることができる入門書のお手本のような一冊。歴史修正主義や反ポリコレに対峙するためにこうした丁寧かつ根気強いアプローチが欠かせないことを実感。コメント付きの巻末のブックガイドも理解深化に役立ちそう。　伊藤弘さん（出版関係）

まさにいま必要な問題意識について、客観的かつ読みやすい内容を、手に取りやすい形式で出版され、素晴らしいと感じました。このタイトルのおかげで、特定の意見や思想を持つ人だけではなく、幅広い人たちが同書を手に取ることができたと思います。　えみさん（一般）

第2位

『タイミングの社会学 ディテールを書くエスノグラフィー』

石岡丈昇

青土社

3080円

フィリピン・マニラのボクシングキャンプ、再開発のために立ち退きを迫られたスクオッター地区の住人たち。自己のタイミングで生きることのできない貧困世界の人びとは、降り掛かってくる事態の中をいかにして生きているのか。彼らの視点からだからこそ見えてくる貧困と構造的暴力を描き出すエスノグラフィー。

選 津畑優子

社会学を志す学生、研究者のみならず、多くの人びとの手にとってほしい一冊。構造的暴力や権力によって自らの「タイミング」を奪われたフィリピンのスラム住民やボクサーに決して同情するのではなく、かれ／かのじょらの実践や抵抗を明らかにしようとする著者の姿から、われわれは何を学べるだろうか。

ゆーさん（一般）

「書くことは考えることである」という印象的な一文から始まる、記念碑的なエスノグラフィー。フィールドに身をひたし、時間のディテールを確実に描いていく。血の通った文体、引用される文献、「洗濯」に代表される豊かな注、どれをとっても文句のつけようがない、素晴らしい1冊。

柴山浩紀さん（出版関係）

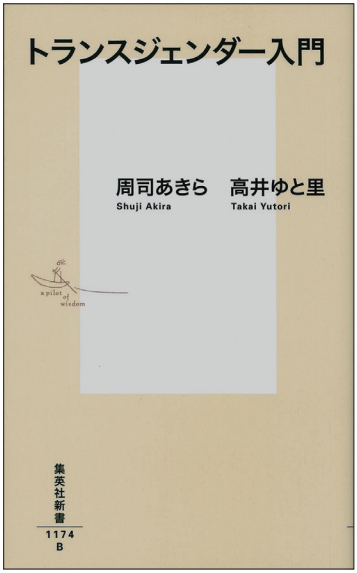
第3位

『トランスジェンダー入門』

周司あきら／高井ゆと里

集英社

1056円



性的マイノリティーに対する認識は近年深まりつつある一方で、誤った知識による当事者への攻撃も絶えない状況が続いています。その中でもSNS上などで度々攻撃の対象となるトランスジェンダーについて簡潔にまとめられた本です。新書という手に取りやすい判型であり、その後より専門的な分野を学ぶきっかけともなる良書だと思います。

ゆうさん（出版関係）

トランスジェンダーに対する差別の高まりに心を痛めているものの、どこから勉強したらよいのかわからず、どうしようかと思っていた折に、この本が出版されました。あまりに悲惨な統計データの数々は読んでいて苦しくなりますが、様々な論点がコンパクトにまとまっていて、入門書としてとても良かったです。

聶さん（一般）

最初に知ってほしいこと。この一言に、尽きている。平明で、噛んで含めるような、冷静な筆致に、「これは、最低限の知識」「話はそれからだ」という思いが伝わってくる。「入門」の書がいま、書かれた意味、書かれなければならなかった意味を、われわれは深く受け止めなければならない。

Fuppuさん（一般）

第4位 『訂正可能性の哲学』

東浩紀
ゲンロン 2860円

多様性という言葉が飛び交うなか、不寛容だと感じることも多いこの頃、訂正可能性の哲学にはそれを乗り越える力があると感じました。どう生きるかという個人的な問題から国家はどうあるべきかという大きな問題まで、多くの人が本書を読み、考えることがよりよい時代を創る糧になると感じました。より多くの人に手にとっていただけますよう、推薦致します。

長谷川名さん（金沢ビーンズ明文堂書店）

第5位 『万物の黎明』

人類史を根本からくつがえす
デヴィッド・グレーバー／デヴィッド・ウェングロウ
酒井隆史（訳）
光文社 5500円

冒頭から、ハラリやジャレド・ダイアモンド、スティーヴン・ピンカーなど、日本でも人気のある著者たちを「ポップ人類史」と一刀両断。未熟でも無垢でもない、遊戯可能性に満ちた人類の祖先の姿を縦横無尽に描き出す。これからの人類史は、本書を避けて通ることはできないだろう。

斎藤哲也さん（出版関係）

第6位 『庭のかたちが生まれるとき』

庭園の詩学と庭師の知恵
山内朋樹
フィルムアート社 2860円

ここまで書けるのかと素で驚いた一冊。現場に深く入り込んだ著者の文と写真は、暗黙知そのものような庭の美学を実践の克明なドキュメントの中で表現する。一つ一つの石の配置、道具や環境との向き合い方を通して、庭師が庭をつくるというより「あってないような庭」が立ち上がるプロセスに立ち会える幸福。（選）野間健司

第7位 『マルクス解体』

プロメテウスの夢とその先
斎藤幸平
講談社 2970円

停滞感が覆う資本主義世界に対する処方箋。限りある地球の資源を無限に収奪する資本主義への対案としてのマルクス再解釈。未来への希望をつなぐかなりスケールの大きな論。正直難解ではあるが確かに内在する可能性を感じた。

（選）生武正基

第8位 『「能力」の生きづらさをほぐす』

勅使川原真衣
どく社 2200円

様々な形で生きづらさを生み出す「能力社会」について、まさにときほぐしながら、立ち止まって考えるきっかけをくれた。絶対的なものとして受け止めがちな「能力」を問い直し、社会を見つめ直す一冊。やわらかな文体で、足元から社会のあり方を考えていくような視点が光っていた。

匿名希望さん（一般）

第9位 『土偶を読む を読む』

望月昭秀（編）
文学通信 2200円

サントリー学芸賞を受賞し、様々な知識人から絶賛され話題になった『土偶を読む』を徹底検証した一冊。果たして土偶の謎は解明されたのか。専門知軽視へ警鐘を鳴らし、現代の考古学研究の最前線も俯瞰できる意欲作。

坪井謙典／天王寺ミオ店

第10位 『超人ナイチンゲール』

栗原康
医学書院 2200円

発売即一気読み。道徳の教科書、聖人、正しすぎて何も言えなくて困る、といったイメージで勝手に塗り固められていたナイチンゲール像を、とにかくぶち壊してくれる一冊。ガラスの天井どころか時代の天井を破った人とはどういうものか、相変わらず破壊力と魅力あふれる文体で描ききっている。読み始めたら止められない作品。

岸山征寛さん（出版関係）

第11位 『依存症と人類』

われわれはアルコール・薬物と共存できるのか
カール・エリック・フィッシャー／松本俊彦（監訳）／小田嶋由美子（訳）
みすず書房 4950円

依存症とは何か？　精神科医であり依存症から回復した当事者でもある筆者は、その答えを見い出すべく、科学や政治、経済、哲学、宗教、そして、それらの間の「溝」にまで目を向ける。依存症の歴史を訪ねることは、自分は何者か、何を欲しているかを問う、著者自身を訪ねる旅でもあった。そこには根深い執着もあったといい、回復過程の10年という歳月が、調査・執筆のために当てられた。『ニューヨーカー』ベスト・ブックス・オブ・2022に選出された1冊。

あんさん（一般）

第12位 『宗教右派とフェミニズム』

ポリタスTV（編）／山口智美／斉藤正美
青弓社 1980円

日本の右派についての調査・報道・研究において、右派がジェンダーにまつわるトピックを集中的に攻撃してきたことはしばしば見過ごされてきた。本書は、圧倒的な情報量でその欠落を補ったもの。現在のトランス排除・性教育攻撃を理解するためにも本書から学ぶべきことはあまりに多い。

高井ゆと里さん（一般）

第13位 『〈公正(フェアネス)〉を乗りこなす』

正義の反対は別の正義か

朱喜哲

太郎次郎社エディタス 2420円

様々な主張が正義に紐づけられ、他者との対立に安易な正当性が与えられてしまう。これは、非常に憂慮すべきであり、SNS的なコミュニケーションの一形態に思われる。この状況をうまく描き出しながら、公正に関する哲学的議論と接続させる上手さ、その説明の簡便さとわかり易さに脱帽するばかりです。　おもむきむきさん(出版関係)

第14位 『自分のために料理を作る』

自炊からはじまるケアの話

山口祐加／星野概念

晶文社 1870円

「一汁三菜」を毎食つくるのは難しい。ついおざなりにしがちな食生活だが、まずは考え方を改めることから始めてみたい。自分のために料理をつくるということは、自分の人生としっかり向き合うということだ。せわしない日常の中で、ふっと肩の力が抜ける現代人への希望の書。　(選)池田匡隆

第15位 『〈悪の凡庸さ〉を問い直す』

田野大輔・小野寺拓也(編著)

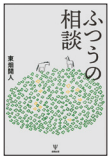
大月書店 2640円

『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』の名コンビを中心とした、もう一つのナチス論。〈悪の凡庸さ〉という概念は、アイヒマンに対し歯車的な誤ったイメージを喚起していたが、シュタングネットや著者らによる再検討を経て、実はそのような人物ではなかった可能性が導かれる。第二部では、学術的な討論の様子がありのままに伝えられ、こちらも興味深い。　(選)小山大樹

第16位 『ふつうの相談』

東畑開人

金剛出版 2420円



ありふれた日常生活の中での、何気ない人との言葉のやり取りに潜む心の動きを言語化してくれる。特に意識することなく私たちが行なっている〈ふつう〉の相談が持っている深い慰めと励ましの力。人間の心の働きを再発見させてくれる一冊。　(選)林愛希生

第17位 『野生のしっそう』

障害、兄、そして人類学とともに

猪瀬浩平

ミシマ社 2640円

「しっそうは、失踪と疾走のあわいに位置する。」知的障害者の兄とそのしっそう、そしてわたしの物語。人類学、障害(学)、ボランティア、農業、そして既に忘れられかけているコロナ禍の日常が、兄のしっそうを軸に時空をあちこちしながら綴られていく。ラスト数ページの余韻が忘れがたい。　(選)松野享一

第18位 『食客論』

星野太

講談社 1760円

ロラン・バルトやフーリエ、石原吉郎といった書き手たちの思考を丁寧に辿りながら、様々なテクストに潜む「食客」や「パラサイト」という不思議な存在から社会のあり方や生き方を考える本です。「読むこと」の倫理を生きる著者の姿勢に感銘を受けました。　KMさん(出版関係)

第19位 『慣れろ、おちょくれ、踏み外せ』

性と身体をめぐるクィアな対話

森山至貴×能町みね子

朝日出版社 1980円

お二人の対談はセクシャルマイノリティ当事者の実感が溢れており、ジェンダーの知識に乏しい自分でも、引き込まれて一気読みした。性、恋愛、結婚、家族、子孫、幸福など様々な切り口で話題が展開していくので、読者がどういった属性であれ、自分との比較で興味関心を持ちやすいと思う。「クィア」の意味を知りたい方に、この1冊から入門してほしい! ペンネーム希望さん(出版関係)

第20位 『言語の本質』

ことばはどう生まれ、進化したか

今井むつみ／秋田喜美

中央公論新社 1056円

オノマトペを皮切りに、子どもはどのように言語習得するのか、なぜ人間は言語を持つのかといった「言語の本質」に迫る一冊。何の知識も持たずに、一から言葉を吸収していく子どもの学習能力は本当にすごい。いつか自分が人の親になった時に、きっとこの本を思い出すんだろうなと感じました。　竹谷かれんさん(一般)

第21位 『明治大正昭和 化け込み婦人記者奮闘記』

平山亜佐子

左右社 2200円

当時の女性記者たちが自らの存在意義を示し、居場所を獲得するためのなりふり構わぬ『闘い』の痕跡を、当時の掲載記事から丹念に拾い集めた一級の資料。でありながらも、なんとなく笑えたり情けなかったりするペーソスが詰まっている。近代女性史であると同時に、日本のジャーナリズム黎明期の批判的検証としても大変興味深い。Besucherさん(一般)

第22位
『ACE アセクシュアルから見たセックスと社会のこと』
アンジェラ・チェン／羽生有希（訳）
左右社　2750円

LGBTQという言葉に代表されるように様々な性的指向に対する知識は広まってきつつあります。その中ではまだそれほど知られていないアセクシュアルという性的指向について当事者のインタビューをまとめる形で紹介している画期的な本です。類書の少ない点も評価されるべき点だと思います。

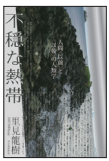
ゆうさん（出版関係）

第23位
『「日本に性教育はなかった」と言う前に ブームとバッシングのあいだで考える』
堀川修平
柏書房　1980円

日本の性教育をまとめた本として、これ以上のものはないと思います。私たちが性教育を語るとき、自分たちの受けてきた時代を基軸にしてしまうものですが、本書を読むと、性教育の歴史というのはもっともっと分厚いということがわかります。「なかった」と思うとき何が起こっていたのか、今後はどうなっていけるのかが網羅的に書かれているほか、希望も感じる一冊です。

よかちさん（一般）

第24位
『不穏な熱帯 人間〈以前と〈以後〉の人類学』
里見龍樹
河出書房新社　2970円



「もう海には住めない――」人新世の時代、ソロモン諸島で「海の民」にとっての自然をいかに民族誌的に記述するか、という意欲作。海面上昇の現実のなか、島の日常で進行しつつある感覚を「不穏」と表現し、人類学の新しい知見・理論を反映しつつも、フィールドワーク日誌や人々の生活の様子が随所に描写されることで、強く想像をかき立てられ、その世界にひき込まれた。

大田光穂／ブランド事業戦略部

第25位
『〈消費者〉の誕生 近代日本における消費者主権の系譜と新自由主義』
林凌
以文社　5060円

これまで何の疑いもなく「戦後に現れたもの」とされてきた「消費者」もしくは「消費社会」というものを、近世から明治にかけての概念の発生からその定着までを描き、戦前から戦後を貫く消費者像を浮かび上がらせた力作であり、現代社会を考えなおすうえでも必読の書。

SOUZさん（出版関係）

第26位
『資本主義は私たちをなぜ幸せにしないのか』
ナンシー・フレイザー／江口泰子（訳）
筑摩書房　1210円

コモンの再生などオルタナティブが提示されつつも、心のどこかで「資本主義はまだ大丈夫」と思っている方々へ（あるいはそんなこと全然考えてもいない方々へ）。コロナ禍を経た、資本主義オワコン論の決定版！

（選）髙部知史

第27位
『謝罪論 謝るとは何をすることなのか』
古田徹也
柏書房　1980円

日常に張り付いている「謝罪」という行為、その「ごめんなさい」言葉だけではとらえきれないものがありますが、冷静に腑分けしてみるととても奥深くて面白かったです。

荒木駿さん（出版関係）

第28位
『目的への抵抗 シリーズ哲学講話』
國分功一郎
新潮社　858円

自由と公的権力との相互関係性、および、消費と浪費との違いについて、哲学的に考究している講義録として読めて、質疑応答も載っているので、専門性は高いが同時にかなり読みやすい本でもある。

@weary_samuraiさん（一般）

第29位
『地霊を訪ねる もうひとつの日本近代史』
猪木武徳
筑摩書房　2640円

それなりの分厚さがあるが、縁のある地域から読んでも良し、今まで行った場所、これから行く場所について読んでも良しと、とにかくどこから読んでも面白い。著者自身や旅の同行者の深すぎる知識と、先々で起きるトラブルの両方を楽しめる良質な紀行文。

倉橋奈生／学校教育営業部

第30位
『障害があり女性であること 生活史からみる生きづらさ』
土屋葉（編著）
現代書館　2750円

「障害」があることと「女性」であることの二つの交差する地点にある人びとの語りから、差別を生み出す社会構造をあぶりだす。目を向けられることのなかった彼女らの「生きづらさ」が言葉にされること自体に大きな意味があり、本書は確かな第一歩となっている。

（選）山田萌果

「紀伊國屋じんぶん大賞2024」選考委員が選ぶ！選外この1冊

『「死にたい」とつぶやく　座間9人殺害事件と親密圏の社会学』

中森弘樹
慶應義塾大学出版会　1980円

日々ネット上でつぶやかれる何万もの「死にたい」を、社会の視点からみつめた一冊。「死にたい」を解きほぐすためには、「死にたい」を言葉にすることが可能な親密な関係が必要である。痛ましい事件を繰り返さないために、どのような人間関係を構築するのか、どういった社会を目指すべきなのか、改めて考えたい。　山田萌果／札幌本店

『言葉の風景、哲学のレンズ』

三木那由他
講談社　1430円

著者が身につけた哲学を実践する様子が鮮明に描かれている。哲学の抽象的な議論と日常生活の具体的な話が高いレベルでシンクロしていて魅力的だ。また、言語哲学を用いることで、会話や映画、漫画にゲームなどの一場面が単なる印象に留まることなく、深い理解を伴う現象として立ち現れていく様が爽快だ。　林愛希生／札幌本店

『言語オタクが友だちに700日間語り続けて引きずり込んだ言語沼 復刻版』

堀元見／水野太貴
バリューブックス・パブリッシング　1650円

人気YouTubeチャンネル「ゆる言語学ラジオ」の初書籍。今までも定期的に「日本語ブーム」は来ていたが、この2～3年の言語学・文化人類学ブームは彼らの影響によるところが大きいのではないだろうか。アカデミアに属さない在野の「言語オタク」がこのようなブームを起こせることが昨今の時代を象徴している気がする。　東二町順也／新宿本店

『旋回する人類学』

松村圭一郎
講談社　1650円

人類学という学問が歩んできた歴史をとおして、問うことの大切さを深く考えさせられる一冊。西欧中心主義のもと飛躍的に発展した学問がある一方で、人類学者たちは自分たちの役割に対して、時に自己批判を繰り返しながら真摯に向き合ってきたことがわかる。これまでの世界があたりまえではないこと、これからの世界をどうしたいのか、私たちも問い続けなければならない。　西口正一郎／横浜店

『差別する人の研究　変容する部落差別と現代のレイシズム』

阿久澤麻理子
旬報社　1870円

「差別する人」に焦点をあてることで浮かび上がってくるものは何か。丹念な実証研究に基づく知見は説得力にあふれる。理論書も大事だが、実証研究の大切さにあらためて気づかされる佳作。　大藪宏一／梅田本店

『15歳からの社会保障　人生のピンチに備えて知っておこう！』

横山北斗
日本評論社　1650円

「15歳から」とのタイトルから中高生向けの本と侮ってはいけない。中流層が激減した現代日本において、社会保障は一番身近なセーフティーネットであり、われわれ大人こそが読むべき本である。本書に登場する10人のストーリーは決して教科書の題材などではない。明日の自分だと想像することも本書の場合は特に大切だろう。巻末の相談窓口リストは、自宅玄関の壁に貼って毎日見ることをお勧めする。　武内一貴／グランフロント大阪店

『わたしが誰かわからない　ヤングケアラーを探す旅』

中村佑子
医学書院　2200円

前作「マザリング」で衝撃を受けた中村佑子さんの新刊。ヤングケアラーを取材していく中で、著者が自身の傷と向き合い葛藤する様が赤裸々に綴られる。自己の消滅と保存を繰り返しながら、犠牲や依存を寄りかかりあって行う。ケア的主体の本質にじっくりと向き合った良書だった。　池田匡隆／ゆめタウン下松店

『場所、それでもなお』

ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン／江澤健一郎(訳)
月曜社　2860円

今年の大賞はナチスに関する歴史書となったが、こちらは細部から同テーマに向かう一冊。特異な美術史家として知られるディディ＝ユベルマンによる、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ探訪記。自身もユダヤ人である著者が、その場所に残された過去の痕跡を写真と文章によって辿る。やや難解な著者の方法論の入門としても読める。　藤本浩介／シンガポール本店

『心霊スポット考　現代における怪異譚の実態』

及川祥平
アーツ・アンド・クラフツ　3300円

ホラーやオカルト、特に心霊ものが大好き。でも幽霊なんて本当はいないと思ってるし、霊感はただの気のせい・思い込みだと思ってるし、心霊写真は全部合成。だからこそ、合成っぽくなくて「本物にしか見えない」映像や心霊写真は怖いしワクワクする。心霊に対してこんなスタンスの方へ、本書を強烈におススメします。心霊スポットがどのように語られ／出来上がるのかの道筋を、民俗学のアプローチで解き明かします。　小山大樹／北海道営業部

『「逆張り」の研究』

綿野恵太
筑摩書房 1980円

ひねくれ者、天の邪鬼、へそ曲がり。みんなと違うオレってなんかカッコイイ？　……マジョリティに与することを否定する理由は何か？　また社会的な存在意義とは？　著者とともにタイムマシンに乗り、今ではネガティブな印象も強い「逆張り」について、2010年代を巡る冒険はとても楽しいものでした。

髙部知史／京都営業部

『解離と嗜癖 孤独な発達障害者の日本紀行』

横道誠
教育評論社 1980円

ドイツが専門の「文学研究者」と発達障害の「当事者研究者」、2つの顔を持つ著者。日本各地をテーマに現在―過去を渉猟し、様々なテクストを引用しつつ、時に俯瞰し、時に寄り添いながら「脳の多様性」を論考する一冊。生きづらさを克服するヒントが得られるかも。

滋野峻也／京都営業部

『「ピアノを弾く少女」の誕生 ジェンダーと近代日本の音楽文化史』

玉川裕子
青土社 2640円

習い事として人気のあるピアノ。でも、なぜフルートでもトランペットでもないのだろう？　そのルーツを文明開化期から丁寧に紐解く。良妻賢母思想との密接な結びつきになるほどと思い、一方で、専門職として活路を見出そうと希望や葛藤を抱き苦悩する女性たちに心を動かされた。西洋音楽の受容をジェンダーの視点から描く非常に興味深い一冊、おすすめです。

津畑優子／学術和書部

『埋没した世界 トランスジェンダーふたりの往復書簡』

五月あかり・周司あきら
明石書店 2200円

とてもわかりやすいことばで、でも、わかりやすくはない、なにかひじょうに大切なことが語られている。トランスジェンダー／ノンバイナリーの当事者による、時にとまどうくらい赤裸々で、誠実なナラティブ／テクストは、読む者の同一性＝アイデンティティを激しく揺さぶる。あなたはどうなの、と。

松野亨一／学術和書部

『索引 ～の歴史 書物史を変えた大発明』

デニス・ダンカン／小野木明恵(訳)
光文社 3520円

索引は、中近世の情報爆発の中で発達し、マジメな読書家の懸念、図書館学の夢を背負って、今日のネット検索にいたる。書物史の才人による本書は、情報論の視野と文学的な人間探求を兼ね備えた稀有な読み物。知と効率を求める人間たちの面白エピソードが満載。本文を読み終えた後も……本書の主役は索引、その心憎い仕掛けをお楽しみあれ！

野間健司／学術洋書部

『幕末維新史への招待』

町田明広(編)
山川出版社 1980円

「尊王攘夷」対「公武合体」など、学校で習った歴史認識が研究の最前線では覆され、同時代の国内情勢は世界史の文脈で把握されるようになっている。中堅若手の研究者たちは、史観に拠ることなく実証研究を進め、日本の歴史をダイナミックに叙述していることをぜひとも知っていただきたい。

山﨑均／西日本設備営業部

『創造論者 vs. 無神論者 宗教と科学の百年戦争』

岡本亮輔
講談社 1980円

聖書が……進化論が……という宗教系海外ニュースはたまに聞く。だがその宗教論争にこんな歴史的経緯があり、これほど激化しているとは知らなかった。無神論者と創造論者、両者の対立は言説の域を越えて明らかに現実に影響を与えるところまできている。また、海外宗教事情を知るだけでなく、日本社会の宗教に対する姿勢とその位置を再確認することができる今こそ必要な本。

生武正基／営業企画部

<紀伊國屋じんぶん大賞2024 選考委員会>

山田萌果 札幌本店
林愛希生 札幌本店
東二町順也 新宿本店
西口正一郎 横浜店
大籔宏一 梅田本店
武内一貴 グランフロント大阪店
池田匡隆 ゆめタウン下松店
藤本浩介 シンガポール本店
小山大樹 北海道営業部
髙部知史 京都営業部
滋野峻也 京都営業部
津畑優子 学術和書部
松野亨一 学術和書部
野間健司 学術洋書部
山﨑均 西日本設備営業部
生武正基 営業企画部

［事務局］
小林彩香 販売促進部
松倉建太朗 ブランド事業戦略部
大田光穂 ブランド事業戦略部